

剛武
一心

八幡商業高等学校

八幡商業高等学校には「剛武」と「一心」の2枚の部旗があります。

まず「剛武」ですが「漢書地理志」の衛という国の説明に「衛には剛武であり気力を尊ぶ気風がある」という記述があり、古くから「強く勇ましい」様子を表す言葉として使われています。また、「一心」には「わき目もふらず心を集中する」という意味があり、古い用例として、5世紀に漢訳された「阿弥陀経」の中の「一心不乱」などがあります。八幡商業の剣道部には、昭和63年の新道場竣工記念に当時の顧問寺井詔一郎先生が編纂された「芦乃芽」と題する八商剣道部の歴史をまとめた冊子があります。

明治32年創部の八幡商業学校剣道部からは、宇野宗佑元県剣道連盟会長、戦後の本県剣道界の恩人保知喜九一元県剣道連盟副会長など県剣道界の重鎮が多く出ておられます。一方、昭和27年の剣道復活後、昭和29年春季高校総体剣道大会では早くも大津東（膳所）・彦根西・長浜北・長浜西（現長浜北星）と並び八幡高（現八幡商）が団体戦を行っていますが、以後、後藤直正先生や寺井詔一郎先生などの指導の下、新制八幡商業高校剣道部も全国大会に何度も出場する県下の名門と成長しました。

「芦乃芽」に載っている写真には昭和46年から「剛武」の部旗が見られ、また、昭和61年には宇野宗佑氏揮毫の「剛武」が新調されているようですが、旧制八商以来の力強い気風がうかがえます。一方昭和56年に作られた「一心」の部旗は、当時、トレーニングに八幡山の階段を駆け上っていた女子部員の姿に感心された八幡山瑞龍寺の小笠原英法門跡が揮毫された文字だと聞き及んでいますが、芯の強い女性剣士を彷彿とさせます。長い歴史の中で培われた伝統を表す部旗の下、今も部員の皆さんは稽古に励んでいます。